

文学テキストの作者

Author of Literary Text

森田 均^{*1}
Hitoshi MORITA

^{*1} 長崎県立大学国際情報学部情報メディア学科
Department of Info-Media Studies, University of Nagasaki

This document describes a proposal of the communications models useful to think about author problem of literary text again.

1. はじめに

コンピュータで文学テキストを生成する際に依拠する文学理論のうち受容理論では、テキストと読者との関係を重視している。筆者も受容理論に基づいて文学テキストのハイパーテキスト化を行っていたが、テキスト外の実世界との関係を検討すると、これまで排除していた作者の存在を再検討する必要があることに気づいた。この発表では、テキスト・作者・読者など従来の受容理論によってモデル化されたコミュニケーション・モデルを再検討する。

2. 研究の背景

2.1 フローティング・ハイパーテキスト

筆者は表現技法としてのハイパーテキストに着目し、受容理論[Jauss 70] [Iser 76]を理論的な支柱として通常のテキストからの変換手順や評価方法の提案をした。また、すべての表現技法の中間的存在として、さらにコンテンツの乗り物としてハイパーテキストの概念を拡張する「フローティング・ハイパーテキスト」を提唱した。これを踏まえて[森田 09]では(1)文学の抽象モデル(2)歴史的テキスト(3)テキストとしてのテレビ番組という3種類の悉皆調査によるデータを具体例として、コンセプトからモデル化を試みた。これは、圧倒的な量の事実から物語の生成へと迫ることができるのか、さらに事実から現実が構築可能なのかという問いに応える試みでもあった。

2.2 作者の死と復活

このように受容理論によってテキストの糸目を解き、反転して新たな織り方を提案しているうちに抹消してしまったはずの作者[Barthes 68] [Barthes 71]を再度召喚しなければならなくなったのかという憂慮が昨年行った筆者による研究発表の結論に刻み込まれた[森田 10]。筆者はこの指摘に応えるべく、それならば作者という存在を強固に要求するようなテキストは何かと具体例を求めて探索を始めた。

3. 検討の対象

本発表では、偽書、ポリフォニックなテキスト群を具体例として考察する。

3.1 偽書

[齊藤 06]によると偽書とは、「正史には登場しない津軽の闇の古代・中世史を、敗者の視点から記した「門外不出」「口外無用」の古文書」と定義されている。本発表ではひとまずこれに従って考察を進める。もちろん東日流(つがる)と名付けられたテキストなので「津軽の闇の古代・中世史」となっているわけである。偽書は全て津軽ということではない。むしろこの引用で留意しておくべきなのは「正史」と「敗者の視点」であろう。司馬遷を挙げるまでもなく、歴史記述とは時代を制した支配者が行うものであり、勝者たる支配者の視点のみが用いられる。異なる視点を全力で排除することこそが戦いに勝利することであり、その後に君臨するということなのだ。その一方で正史には記載されないもう一つの歴史、あるいは滅ぼされた者のみが知っていた歴史があった、とするのが偽書の出発点となる。ここで正史と闇の歴史が交錯する。現代において正史の位置づけは、戦闘にはよらず原典あるいは本文至上であるか炭素年代測定などの物証によるかによって判定される。この判定の場で偽書は、論争を仕掛けて自らが原典を主張し、物の形を捨てることによって正史と対峙する。「東日流外三郡誌」は津軽の知られざる古代史を記したものであるが、先祖代々門外不出とされながら明治時代に偶然発見されたものを書き写している。

3.2 テーマとしてのフェイク

このようにテキスト作成の意図を明確にすることによって偽書は成立する。意図があるところには作者が存在する。偽書つまり偽りの書があれば偽物、偽絵、贋作も次々に出現する。作者によって偽物たる意図を明確にして作成される。井上靖「ある偽作家の生涯」[井上 51_74]は、日本画の巨匠の伝記を準備するうちに遭遇した贋作からその作者を突き止めようとするストーリーであるが、ここでテキスト中の語り手は偽作家とは一度も対面することなく、また偽作家に直接語らせることもない。同じ作者による「澄賢房覚書」[井上 51_72]も経文解釈書の作者像に迫るものであるが、後に点綴法と名付けられた同じ叙法によっている。原典は無いが書き写したのものがある、何かが急に出土するという偽書作成システムとテキストのメインキャラクターを伝聞によって叙述する手法とは、中心を欠如させているところが共通している。偽書とは、フィクションを紡ぐことである。

3.3 ポリフォニックなテキスト群

ここで固有名が出た井上靖という作家は、どのように位置づけられるか。「貧血と花と爆弾」という風変わりな題名の小説[井上 52_74]がある。ここで描かれているのは、日本初の民間放送として大阪に開局したラジオ局に関する草創期のエピソードであり、

連絡先: 森田均, 長崎県立大学国際情報学部情報メディア学科, 851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1, 095-813-5105(研究室直通, Fax 兼用), morita@sun.ac.jp

メインキャラクターとなったのはそのラジオ局をメディアとして自立させるために親会社から出向した新聞記者である。このテキストは現在の毎日放送の前身である新日本放送という実在するラジオ局が開局した一年後に発表されたもので、同じエピソードがメインキャラクターとなった新聞記者の側から語られ[小谷 51][小谷 52][小谷 58]、そしてラジオ局は社史の中で紹介し[新日本放送 54][毎日放送 61][南木 76][毎日放送 01]、加えて井上靖という作家による作者解題がある。さらにメインキャラクターの評伝[馬場 07]もあり、同じエピソードが様々な視点から語られている。これらのテキスト群は聖書の4福音書のような共感あるいはポリフォニックな関係にある。そしてこれらのテキスト群には、用語や叙法など共通点も見受けられ相互の影響関係を示すことは可能である。ただし、文学あるいは文壇という制度内においてノーベル文学賞候補と称賛させた井上靖という作家システムを備えた作者の影響力が最も強い。一方で社史は、記された各年代の支配者(経営者)の意図を反映させた異なるテキストを形成する。このように同じエピソードに対して異なるテキストが成立するこれらの事例を前にして、テキスト生成のモデルを想定するとそれぞれ異なる作者という装置が必要となる。

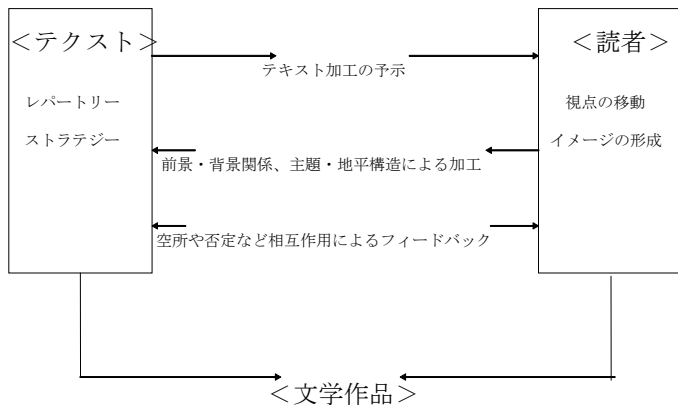
4. コミュニケーション・モデル

4.1 装置としての作者

これ以降、作者問題を再考するにあたって本発表ではひとまず、作者という装置があるべきだが、その作者にキャラクターは必要無い、という仮の結論を置いて[Iser 76]及び[Waldmann 76]を結合し発展させたテキストに関する作者と読者の新たなコミュニケーション・モデルを示す。

4.2 Iser のモデル

図 1 に示したのは、Iser による読書という行為をモデル化したものである。ここでは、読者と作者ではなく、読者とテキストとのコミュニケーションによって「文学作品」が成立するプロセスを描いている。作者が存在しないことに注目すべきである。



＜図 1: 読書行為のモデル＞

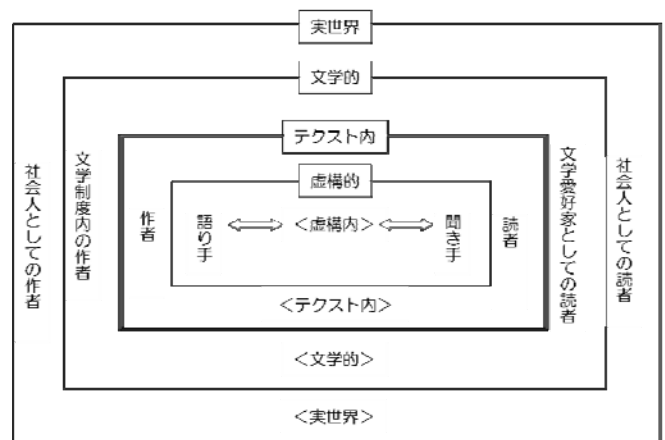
4.3 Waldmann のモデル

上記に対して図 2 で明らかなように Waldmann のモデルには作者が存在する。ここでは、作者と読者が状況によって役割を変化させる。実世界から虚構の内部まで入れ子構造となっている。

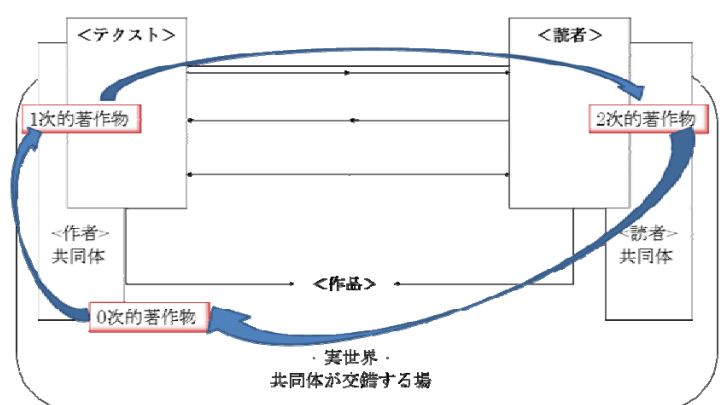
る。作者は存在するものの、作家という意味ではなく、テキストという相互作用の場で読者とやりとりを行う相手として対峙させているのである。

4.4 筆者が提案するモデル

二つの既存モデルを結合させたのが、図 3 で示した本発表で提案するモデルである。Iser のモデルでは、作者を消滅させることには成功したが、テキストと読者によるコミュニケーションのプロセスから「文学作品」が生成される場がどこなのか明らかにできていない。Iser は読書行為の中で一回ごとに成立するのが「文学作品」であるとしたが、図 1 ではうまく配置できない。Waldmann の場合は、状況による変化は描くことが出来ても連続性が明らかにならない。そこで両者を接合して「作品」生成のプロセスを段階的に示したのが筆者によるモデルである。読者と対峙するのはテキストであるが、テキストの背後には個別では無いものの「作者」を位置付けることが可能となる。



＜図 2: テキスト内コミュニケーションのモデル＞



＜図 3: 筆者が提案するモデル＞

【付記】本論文は、平成 21～23 年度日本学術振興会科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)による研究成果の一部である。(課題番号: 21653042「フィクションから言説と事項を抽出して構築するモデルに基づく情報社会論の試み」研究代表者: 森田均)

参考文献

- [馬場 07] 馬場康夫: 「エンタメ」の夜明け ディズニーランドが日本に来た!, 講談社, 2007.
- [Barthes 68] Barthes, Roland: *La mort de l'auteur*, 1968. 花輪光・訳: 「作者の死」(ロラン・バルト: 『物語の構造分析』, 花輪光・訳, みすず書房, 1979)
- [Barthes 71] Barthes, Roland: *De l'oeuvre au texte*, 1971. 花輪光・訳: 「作品からテキストへ」(ロラン・バルト: 『物語の構造分析』, 花輪光・訳, みすず書房, 1979)
- [井上 51_72] 井上靖: 澄賢房覚書, 井上靖小説全集 15, 新潮社, pp.294-324, 1972. (初出: 文学界 1951.06)
- [井上 51_74] 井上靖: ある偽作家の生涯, 井上靖小説全集 4, 新潮社, pp.5-36, 1974. (初出: 新潮 1951.10)
- [井上 52_74] 井上靖: 貧血と花と爆弾, 井上靖小説全集 4, 新潮社, pp.324-361, 1974. (初出: 文芸春秋 1952.02)
- [Iser 76] Iser, Wolfgang: *Der Akt des Lesens*, Wilhelm Fink Verlag, 1976. (饒田収・訳: 『行為としての読書』, 岩波書店, 1982)
- [Jauss 70] Jauss, Hans Robert: *Literaturgeschichte als Provokation*, Suhrkamp Verlag, 1970. (饒田収・訳: 『挑発としての文学史』, 岩波書店, 1976)
- [小谷 51] 小谷正一: 黒馬になりたい--新日本放送の立場から, 新聞と広告 6(8), 日本電報通信社, pp.7-9, 1951.07.
- [小谷 52] 小谷正一: 外野席から, 新聞ラジオ広告 7(5), 日本電報通信社, pp.36-38, 1952.05.
- [小谷 58] 小谷正一: 国際興行師の泣き笑い--海外芸能人招聘の黒幕と呼ばれて, 文芸春秋 36(4), 文芸春秋社, pp.280-293, 1958.04.
- [毎日放送 61] 毎日放送: 毎日放送十年史, 毎日放送, 1961.
- [毎日放送 01] 毎日放送: 毎日放送 50 年史, 毎日放送, 2001.
- [森田 09] 森田均: 事実とテキスト再考, 日本認知科学会第 26 回大会発表論文集, 日本認知科学会, CD-ROM, 2009.
- [森田 10] 森田均: 実世界から作品へ, 日本認知科学会 文学と認知・コンピュータ研究分科会 II (LCCII) 第 23 回定例研究会 予稿集, on the Web: [http://www.ogata.soft.iwate-pu.ac.jp/LCC2_Web/Proceedings/Proceedings\(23\)/23W-01Morita.pdf](http://www.ogata.soft.iwate-pu.ac.jp/LCC2_Web/Proceedings/Proceedings(23)/23W-01Morita.pdf), 2010.
- [南木 76] 南木淑郎: 楊梅は孤り高く 毎日放送の二十五年, 毎日放送, 1976.
- [斉藤 06] 斉藤光政: 偽書「東日流外三郡誌」事件, 新人物往来社, 2006.
- [新日本放送 54] 新日本放送: NJB の四年, 新日本放送, 1954.
- [Waldmann 76] Waldmann, Günter: *Die Ideologie der Erzählform*, München : W. Fink, 1976.